

付篇1

山口市秋穂菅倉古墳の出土遺物

横山 成己

1. 資料の由来(写真77・78)

筆者は当館に着任以降、所蔵される主として山口県内遺跡の未公開資料を断続的に公開しているが、本稿では山口市秋穂に所在した菅倉古墳にて発掘調査され、本学に所蔵された資料を報告する。

菅倉古墳は、山口市秋穂菅倉山の北西斜面(標高15m)に所在した。菅倉古墳の調査に関しては、小野忠熙と松田治登の報告によりその概要を知ることができる(小野1967・松田1982)。調査経緯を見ると、昭和37年(1962)7月20日、農業構造改善事業によるみかん園の開墾作業中に発見され、秋穂町教育委員会からの依頼により同年7月14日から15日にかけて本学助教授である小野忠熙(現:名誉教授)と本学学生により緊急発掘調査が実施されたようである。

出土遺物に関しては、小野報告では「礫床面から金環各1個、鉄刀、刀子、鉄鏝の断片若干を、また側石に接して、焼成不良な須恵器の高坏1個を検出した。なお石室を充填していた埋積土の中から土鼎2個体分を採集し」、松田報告では「金メッキされた耳環と高坏・玉類などが検出」とされている。

この内、須恵器高坏と耳環、玉類は秋穂町に收藏され、松田報告に図示されることとなり(図42)、瓦質土器足鍋(小野報告では「土鼎」と表記)1点とともに旧秋穂町に收藏されていたそうであるが、これとは別に本学にも出土資料の一部が收藏された。当館設立後にコンテナNO.48袋NO.16に收藏された耳環1点、コンテナNO.48袋NO.17に收藏された耳環1点、コンテナNO.93袋NO.41に收藏された鉄器類、コンテナNO.48袋NO.15に收藏された瓦質土器足鍋1個体分である。平成25年度に大学情報機構長裁量経費の予算配分を受け、本学所蔵学術資産継承事業の一環として出土金属器類の保存処理および成分分析事業を実施した。本稿は事業成果報告を兼ねるものである。



図 38 遺跡位置図



写真 77 耳環保存処理前



写真 78 鉄器保存処理前

2. 遺跡の立地、現況と石室構造 (図38・39、写真79～81)

遺跡は、秋穂半島南端部に聳える草山(標高約110m)の北西丘陵部に位置する。古墳が立地したとされる標高10m～20mコンタラインは草山北方の丘陵地に続くため、古墳築造当時の草山も本州と連絡していたことが分かる。山口県における瀬戸内沿岸丘陵部の古墳は海側(南方)に面して築造される事例が散見されるが、草山の南側丘陵は急峻で古墳築造には適さない。当墳は古墳の北西に位置する尻川湾沿岸を意識して築かれたものと思われる。松田報告でも石室の主軸は「N-120°-W」とされており、これを裏付ける。平成26年(2014)2月8日に実地調査を実施したが、発見原因となったみかん園はすでに廃園しており、古墳の痕跡も確認することはできなかった。

小野報告と松田報告から古墳の状況を確認すると、発見時古墳の封土上部はほぼ失われており、石室も基底部分近を残し完全に破壊されていたようである。写真で見える限りは石室石材は主として花崗岩が使用されている。秋穂半島は古くより良質な花崗岩産出地であり、地元石材を使用したものと思われる。奥壁と奥壁側側壁第1石は長さ約2m程度の切石が用いられ、開口部側側壁は高さを揃えるため幅を均等にした割石も用いられており、精巧なつくりであったことが見て取れる。

玄室床面は「径10～24cmばかりの浜の小石を敷いた礫床」(小野報告)、「大小さまざまな礫が敷かれているが、部分的になくなったところもある」(松田報告)とされ、写真や平面図からも礫床であったことは確実である。石室平面図に見られる礫床は石室西北部に設置された石列部で途切れていることから、この石列を框石として玄門と見なし、無袖単室構造の横穴式石室と判断したいところであるが、小野は「内部主体の構造は横穴式石室と異なり、厚さ36-48cmばかりの自然石と割石3個を縦に使うコノ字形に囲み、不足の部分や入口に当たる個所には大の自然石や割石を置いて方形に近い長方形(約2.1m×1.7m)にめぐらし、一見組合式箱式石棺を大きくしたような構造を呈している」と私見を述べている。松田も「玄室部と羨道部にあたると思われるところは、比較的小型の花崗岩自然石と割石が用いられているが、動かされた可能性が強く、旧状のままかどうか疑わしい」と述べるに留めている。石室の埋積土中からほぼ完形に復元される瓦質土器足鍋が2個体出土していることから、本墳は室町期以降に野営施設や作業小屋として再利用された可能性が指摘され、限られた情報からの石室構造に関するこれ以上の考察は無意味と言える。

3. 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵菅倉古墳出土遺物 (図40・41、写真82～86、表8・9)

当館には、菅倉古墳出土品として耳環2点と鉄器片52点、瓦質土器足鍋^{註6}1個体分が所蔵される。平成25年度に金属器類の保存処理および耳環2点の成分分析業務を、株式会社吉田生物研究所に委託した。成分分析に関しては本書付篇2にて詳細を確認いただくこととして、本稿では資料の概要を報告する。なお、出土資料は全てに略号(HK=HAZUKURA)下に連番を付して収蔵している。

【装身具】

HK1は銅地金貼り耳環。砒素を含む銅芯に銀と銅をわずかに含む薄い金板が巻かれており、木口接面に金板の畳み込みが観察される(付篇2写真89)。直径は2.3～2.4cmで、重量は5.27g。山口市(旧秋穂町)所蔵の耳環(図42)とセット関係にある可能性が高い。HK2は銅地銀貼り耳環。砒素や少量の鉛が含有される銅芯に銀の薄板が巻かれ、表面に少量の金を含む鍍銀が施されている。HK1同様、木口接面に銀板の畳み込みが観察される(付篇2写真90)。直径は2.6～2.9cm、重量は13.64g。

【工具】

HK3は鉄製刀子。両関づくりで、刃部の一部と切先、茎端部を欠失する。茎部には部分的に木質が

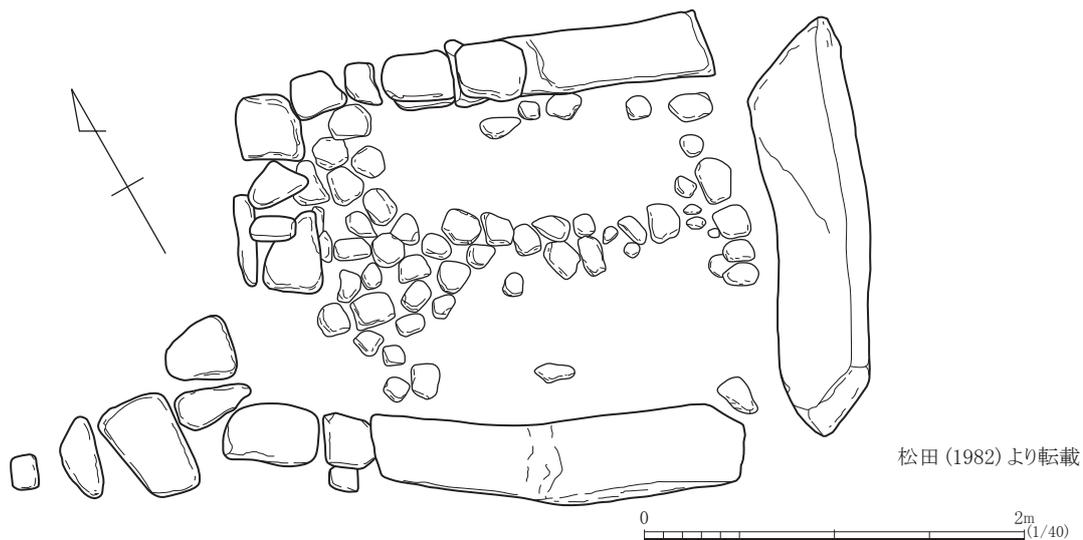


図 39 菅倉古墳石室平面図



写真 79 発掘調査時の菅倉古墳石室（西から）



写真 80 遺跡地遠景（西から）



写真 81 遺跡地近景（西から）

遺存する。HK4も鉄製刀子の刃部片。莖部と切先を欠失する。

【武具】

HK5は尖根系長頸式鉄鏃と見られ、頸部上位と鏃身を欠失する。頸莖の境界は両関づくり。残存長7.6cmを測る。HK6・7・8は鉄鏃莖部片と見られる。断面形態は長方形または台形を呈する。HK9・10は鉄鏃頸部もしくは莖部片と推定されるが、判別できない。HK11は鉄鏃莖端部片。HK12は剥離が激しいものの鉄鏃鏃身部片の可能性を残す。

HK13～18は鉄刀の断片である。接合状態が悪く、個体数の把握は困難である。HK13・14・16は表面の剥離等劣化が比較的少ない資料であり、背に原面を残している。HK17は片面に木質が残っている。

HK19～46は鉄片で、いずれも鉄刀、刀子、鉄鏃の剥離片と見られる。HK20は背と見られる原面が残ることから、刀子の断片と推定される。HK38は表面にわずかに木質が遺存する。

HK47は鞘もしくは柄の責金只と見られ、内面に木質を残している。長径1.8cm以上、短径2.2cmを測る。HK48は弧状に曲がる鉄片であり、刀装具(鞘尻や柄頭等)の一種である可能性が残る。

これら鉄器類の総重量は207.15gを量る。

【土器】

当館に収蔵される菅倉古墳出土土器資料は、HK49瓦質土器足鍋が唯一のものである。脚部は端部を屈曲させず、口縁は屈曲気味に外傾させ、端部内面に肥厚帯を貼り付けている。口縁外面調整はヨコハケ後ナデ、内面上位はヨコハケ、下位はヨコナデを施す。体部外面は全体にナデ調整を施すが、下位に格子タタキが残っている。体部内面はヨコハケ、下位にはタテハケも施す。ゆがみが大きい個体であるが口径はおよそ25.5cmに復元される。器高は22.6cmを測る。岩崎仁志氏の分類ではVB式に、編年案では16世紀後半に比定される(岩崎1999)。

4. 山口市(旧秋穂町)所蔵菅倉古墳出土遺物(図42)

実物は現在所在不明であり、松田報告に掲載された遺物実測図と『中津原遺跡』(大村・福本2000)に掲載された須恵器高坏カラー写真に頼るほかない状況である。

松田報告に図示された資料は、須恵器高坏1点、耳環1点、玉類8点である。須恵器高坏は唯一古墳の所属時期を推定しうる資料である。図によると口径11.5cm程度、残存高は口縁下に14cm弱と見られる。脚裾部は欠失する。図示されていないが、カラー写真を見ると脚柱中位下方に3条程の凹線が巡っており、坏部外面には坏底と口縁との境界部に明瞭に凹線が巡っている。スカシが消失しているものの、未だ長脚を残していることから、所属時期は7世紀前半から中頃を想定したい。耳環1点に関しては、小野報告と松田報告から銅地金貼り耳環と想像される。前述したが、HK1と対になる可能性が高い。玉類8点はガラス小玉であろうか。具体的な記述がないため素材等不明である。

5. 小結

菅倉古墳は、県央部にて瀬戸内に南流する佐波川と榎野川にはさまれた沿岸地帯、旧秋穂町に所在した終末期古墳である。当該地での遺跡調査例は少なく、当墳の有する学術的価値は極めて高い。

榎野川河口広域の終末期古墳の状況を概観すると、榎野川右岸に関しては、南方の宇部市北部から旧阿知須町沿岸部までは複室構造の横穴式石室墳が顕著に分布し(隈1968、富士埜1977・1978)、河口部では単室構造の横穴式石室墳と混在する様相を見せる(豊島ほか1998、山本ほか1999)。一方で旧秋穂町を含む榎野川左岸域に分布する終末期古墳はいずれも単室構造の横穴式石室墳であり(富

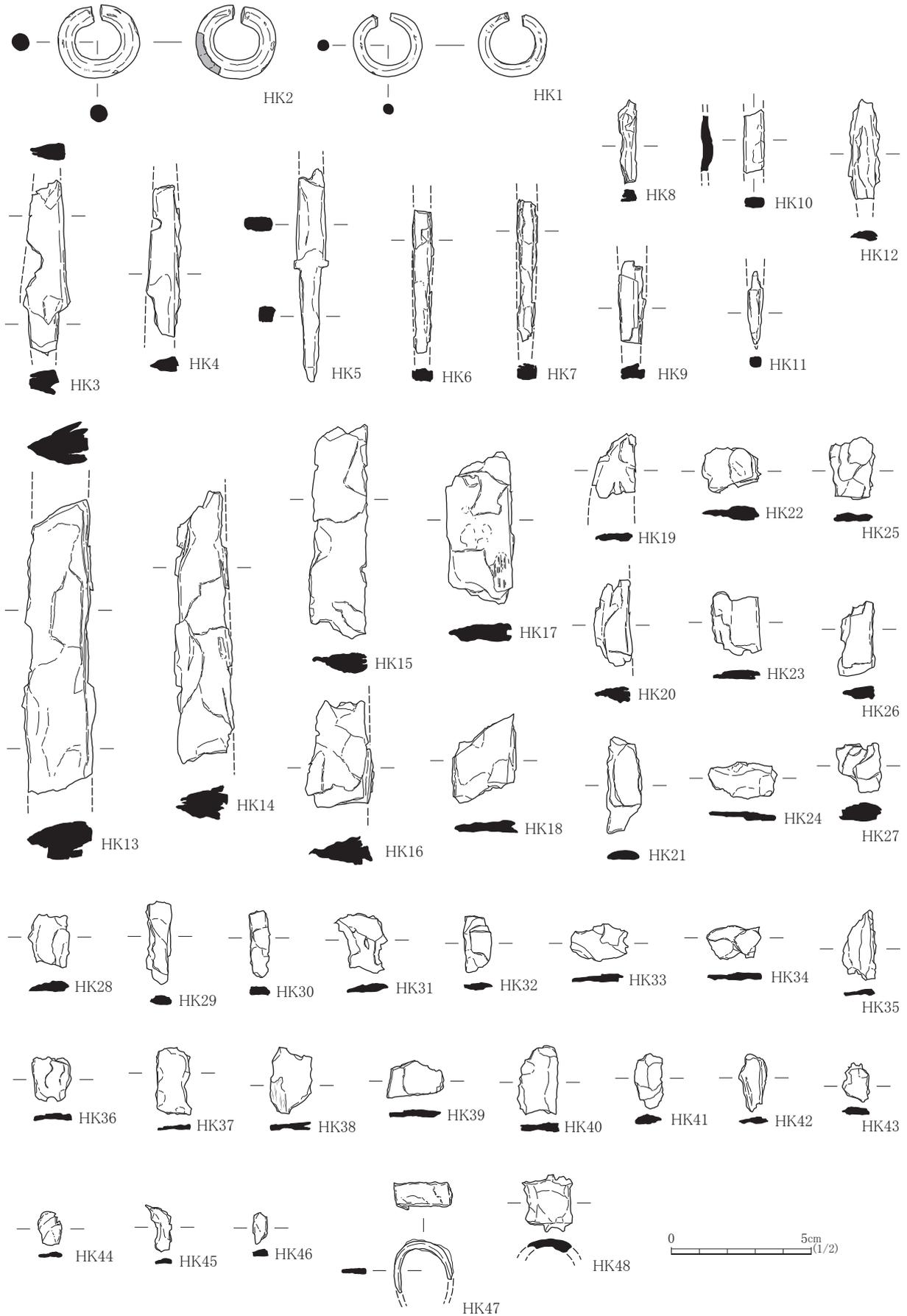


図 40 菅倉古墳出土金属器実測図

上埜1973a・b、磯部2005)、現状では明確な地域差を示している。菅倉古墳の石室構造は不明であるが、未発見のものを含め当該地の未調査墳は少なからず存在するため、今後の動向を注視したい。

本稿を結ぶに当たり、旧秋穂町所蔵の菅倉古墳出土資料所在調査に関して、青島啓氏(山口市教育委員会)に多大な労をおかけした。また、川島尚宗氏(当館助教)には遺物トレースにおいて援助を得た。末筆であるが記して感謝の意を表したい。

【註】

- 1) ○横山成己(2011a)「光市小周防相ヶ迫出土の土製経容器」, 山大学埋蔵文化財資料館(編)『山大学埋蔵文化財資料館年報—平成17年度—』, 山口 ○横山成己(2011b)『見島ジーコンボ古墳群 第154号墳出土資料調査報告』, 山大学埋蔵文化財資料館(編), 山口 ○横山成己・松浦暢昌(2012)『見島ジーコンボ古墳群 第151号墳出土資料調査報告』, 山大学埋蔵文化財資料館(編), 山口 ○横山成己(2013a)『見島ジーコンボ古墳群 第152・153・155・156号墳出土資料調査報告』, 山大学埋蔵文化財資料館(編), 山口 ○横山成己(2013b)「下松市御屋敷山古墳の出土遺物」, 山大学埋蔵文化財資料館(編)『山大学埋蔵文化財資料館年報—平成19年度—』, 山口 ○横山成己(2014)「下松市花岡八幡宮裏山資料と花岡古墳群」, 山考古学会(編)『山考古 第34号 山本一朗先生追悼号』, 防府(山口)
- 2) 松田報告では標高10mとなっている(松田1982)。
- 3) 古墳発見日と調査日に齟齬を来しているが、小野忠熙報告(小野1967)をそのまま引用する。
- 4) 資料の所在確認は青島啓氏(山口市教育委員会)に依頼したが、所在不明とのことであった。なお平成12年(2000)刊行の『中津原遺跡』(大村・福本2000)には高坪のカラー写真が掲載されており、刊行時点まで存在していたことは確実と思われる。
- 5) 1962年7月14～15日の出上年月日を有する。
- 6) 別個体の足鍋脚部も1点存在するが、旧秋穂町所蔵の足鍋に接合する資料と見られる。
- 7) この他、「古敷郡秋穂町菅倉」の地名を有する遺物に、コンテナNO.68袋NO.14「菅倉泥炭層 1959年5月11日」土師器1点、コンテナNO.80袋NO.2の縄文土器・弥生土器・土師器片23点が存在する。前者は採集年月日の違いから、後者は古墳の東に近接する菅倉遺跡での採集品と推定されることから、本稿では報告を省く。

【文献】

- 磯部貴文(2005)「雄島古墳 第1次調査」, 山口市教育委員会文化財保護課(編)『山口市埋蔵文化財年報4』, 山口
- 岩崎仁志(1999)「足鍋再考」, 財団法人山口市教育財団山口市埋蔵文化財センター(編)『陶垣』第12号, 山口
- 大村秀典・福本和久(2000)『中津原遺跡』山口市埋蔵文化財センター調査報告第15集, 財団法人山口市教育財団山口市埋蔵文化財センター(編), 山口
- 小野忠熙(1967)「山口市古敷郡菅倉山古墳」, 日本考古学協会(編)『日本考古学年報』16号, 東京
- 隈昭志(1968)「岩宮古墳」, 「宇部の遺跡」編集委員会(編)『宇部の遺跡』, 宇部
- 豊島正之ほか(1998)『浦辺古墳群・大浦古墳群・梅ヶ崎古墳群・小郡開作経塚』山口市埋蔵文化財センター調査報告第1集, 財団法人山口市教育財団山口市埋蔵文化財センター(編), 山口,
- 富士埜勇(1973a)『幸崎古墳』山口市埋蔵文化財調査報告第14集, 山口市教育委員会(編), 山口
- 富士埜勇(1973b)『幸崎古墳・松ヶ迫遺跡』山口市埋蔵文化財調査報告第26集, 山口市教育委員会(編), 山口
- 富士埜勇(1977)『引野遺跡・丸塚古墳群』, 阿知須町教育委員会(編), 山口(旧阿知須)
- 富士埜勇(1978)『引野遺跡・丸塚古墳』, 阿知須町教育委員会(編), 山口(旧阿知須)
- 松田治登(1982)「第1章 秋穂の原始文化」, 秋穂町史編集委員会(編)『秋穂町史』, 山口(旧秋穂)
- 山本義信ほか(1999)『大浦古墳群・梅ヶ崎古墳群』山口市埋蔵文化財センター調査報告第11集, 財団法人山口市教育財団山口市埋蔵文化財センター(編), 山口

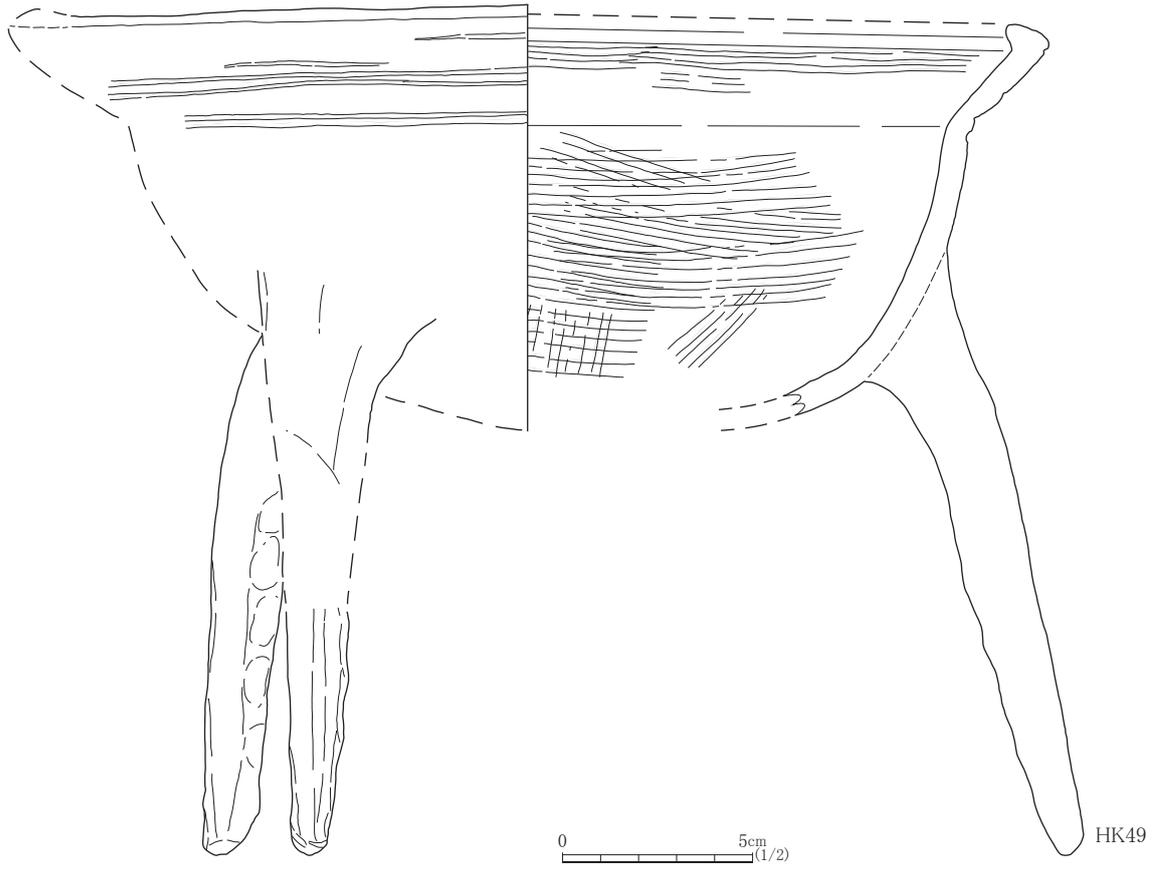
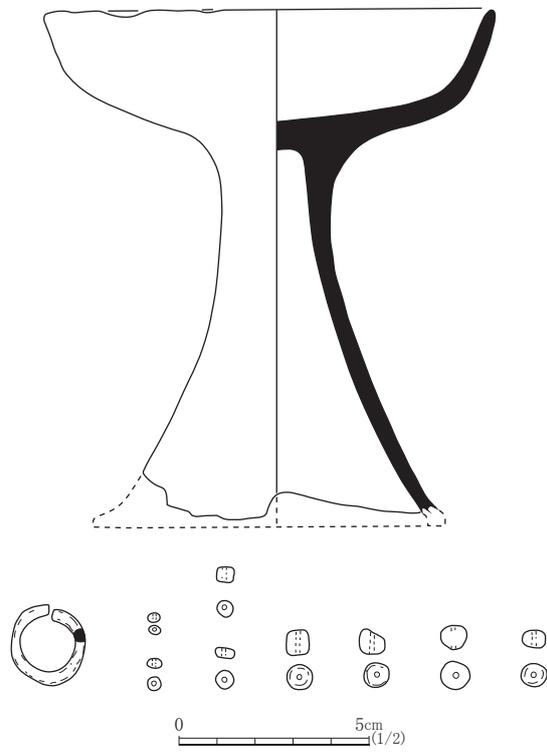


図 41 笹倉古墳出土土器実測図



写真 82 笹倉古墳出土土器



松田 (1982) より転載

図 42 山口市 (旧秋穂町) 所蔵笹倉古墳出土遺物実測図



※ほぼ実寸

写真 83 菅倉古墳出土金属器①

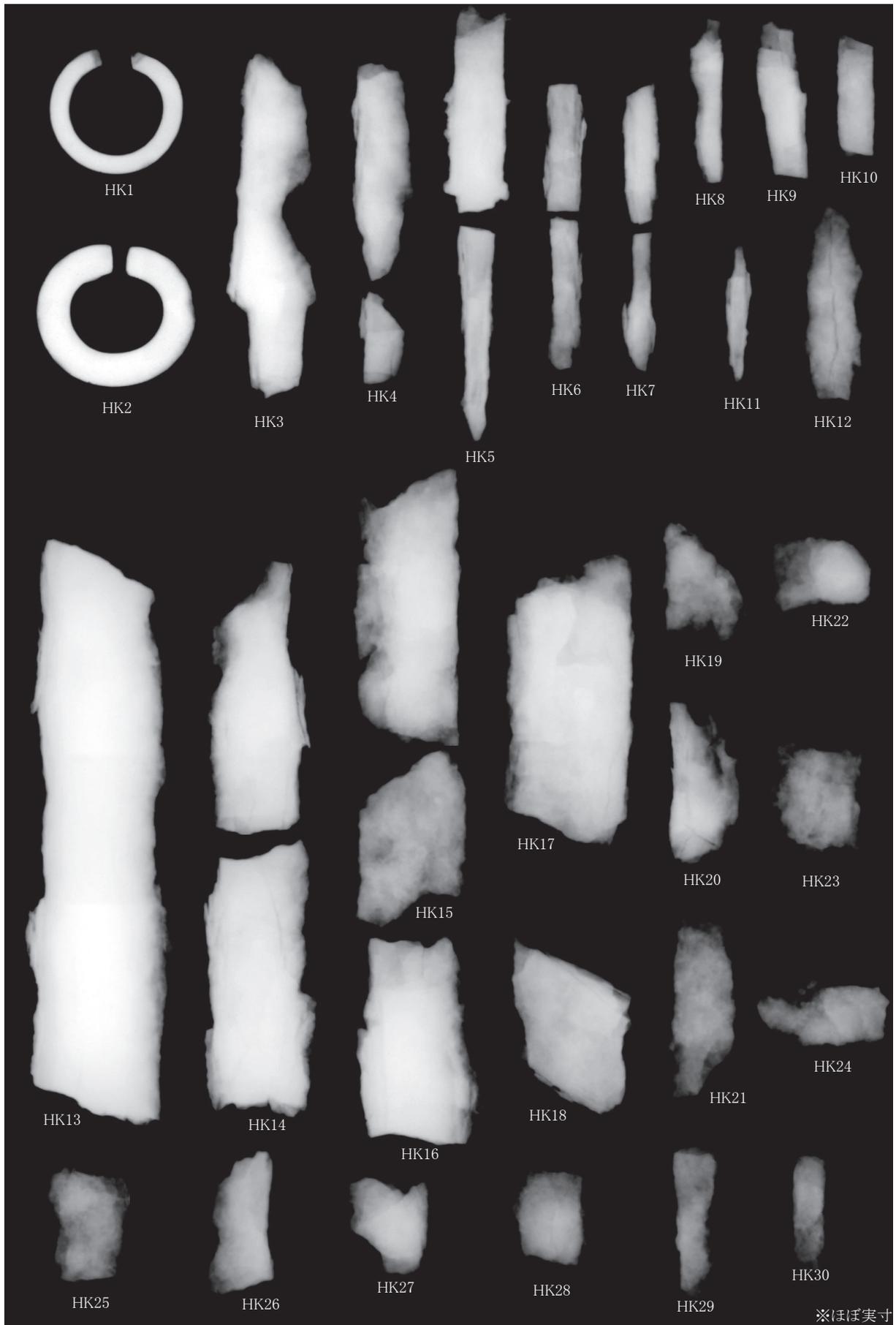


写真 84 笹倉古墳出土金属器 X 線画像①

山口市秋穂菅倉古墳の出土遺物

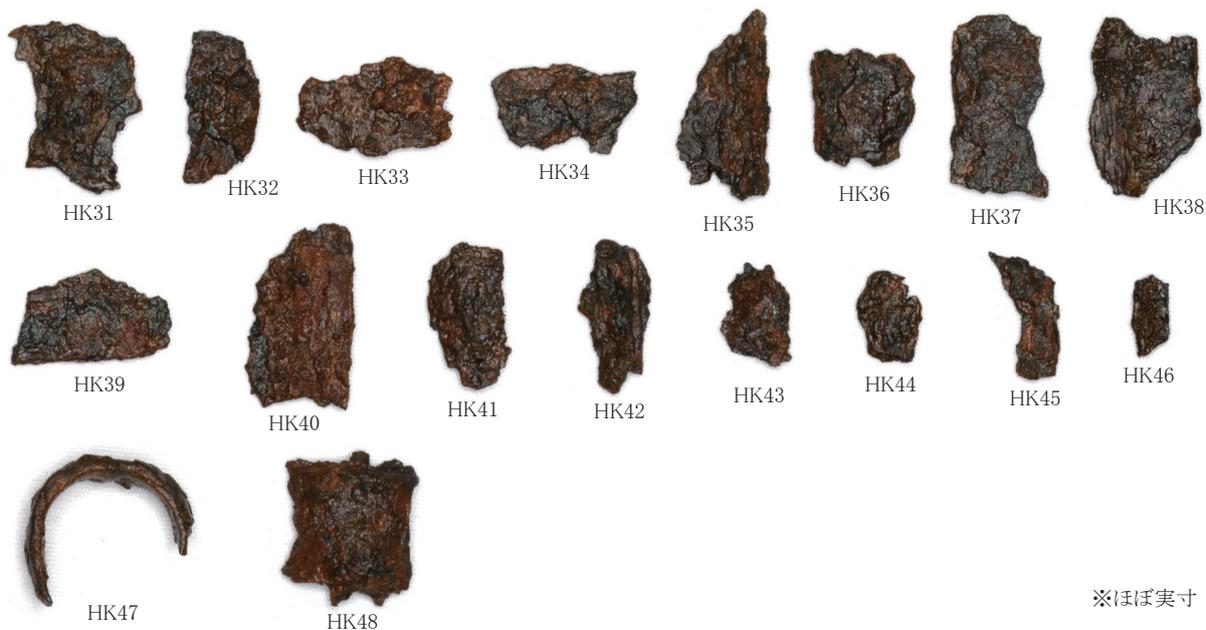


写真 85 菅倉古墳出土金属器②

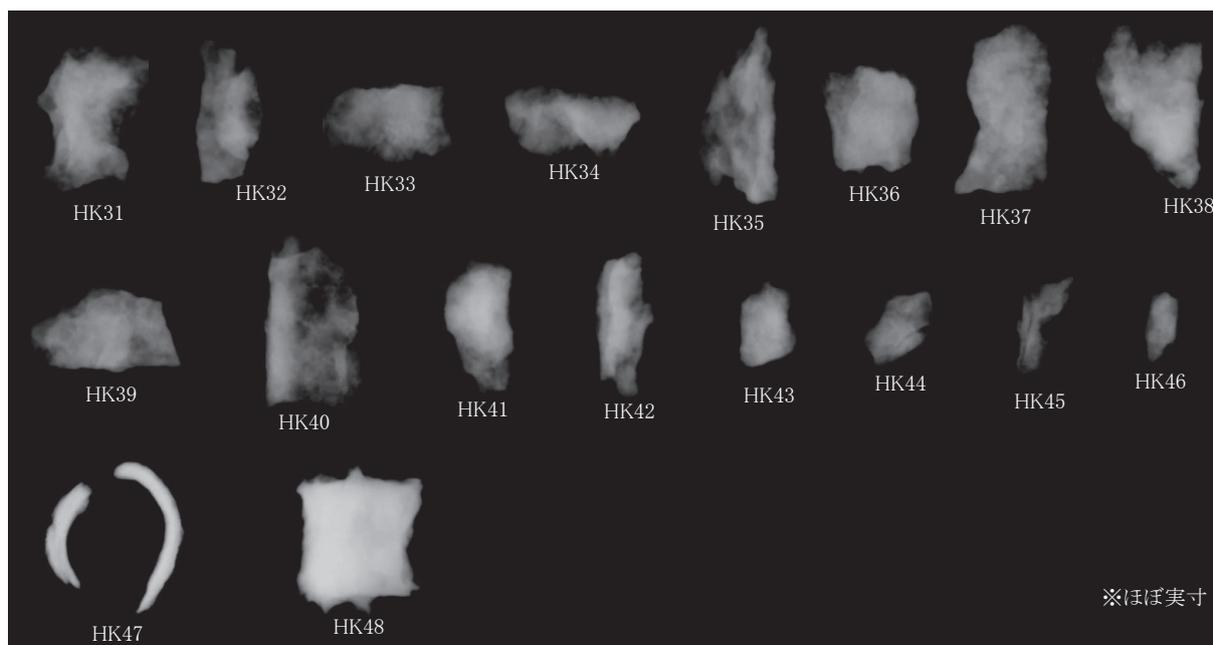


写真 86 菅倉古墳出土金属器 X 線画像②

表8 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm)	色調	胎土	備考
				①口径②底径③器高	①外面 ②内面		
HK 49	菅倉古墳	瓦質土器 足鍋	ほぼ 完形	①(25.5)ゆがみ大 ③22.6	①②暗灰色(N3/ ～浅黄色(2.5Y7/3)	密(0.1～1.5mmφの砂粒を 少量含む)	底部外面格子 子叩き

表9 出土遺物(金属器)観察表

法量()は復元値

遺物番号	遺構	種別	法量(cm)	備考
HK1	笹倉古墳	耳環	長径2.4 短径2.31 軸径0.4 重量5.27g	銅地金貼り 銅軸に緑青ふく
HK2	笹倉古墳	耳環	長径2.85 短径2.59 軸径0.65 重量13.64g	銅(銀)地銀板貼り 部分的に銀板剥離
HK3	笹倉古墳	刀子	残存長6.3 最大幅1.6 最大厚1.0 重量11.1g	両関 切先と茎端部を欠失 茎に木質遺存
HK4	笹倉古墳	刀子	残存長5.45 最大幅1.13 最大厚0.55 重量4.75g	
HK5	笹倉古墳	鉄鏃	残存長7.6 最大幅1.18 最大厚0.62 重量6.96g	両関 茎部断面四角形
HK6	笹倉古墳	鉄鏃	残存長5.2 最大幅0.72 最大厚0.46 重量2.54g	断面長方形 茎部か
HK7	笹倉古墳	鉄鏃	残存長5.15 最大幅0.71 最大厚0.59 重量2.7g	断面長方形 茎部か
HK8	笹倉古墳	鉄鏃	残存長3.05 最大幅0.65 最大厚0.66 重量1.31g	断面台形 茎部か
HK9	笹倉古墳	鉄鏃	残存長3.0 最大幅0.9 最大厚0.62 重量2.16g	断面長方形 茎部または頸部
HK10	笹倉古墳	鉄鏃	残存長2.3 最大幅0.72 最大厚0.36 重量1.17g	断面長方形 頸部か
HK11	笹倉古墳	鉄鏃	残存長2.65 最大幅0.52 最大厚0.71 重量0.71g	断面方形 茎端部
HK12	笹倉古墳	鉄鏃	残存長3.65 最大幅1.1 最大厚0.34 重量1.8g	鏃身部か
HK13	笹倉古墳	鉄刀	残存長10.56 最大幅2.66 最大厚1.44 重量65.15g	背に原面残る
HK14	笹倉古墳	鉄刀	残存長9.85 最大幅2.0 最大厚1.15 重量28.73g	背に原面残る
HK15	笹倉古墳	鉄刀	残存長7.7 最大幅2.03 最大厚0.72 重量13.26g	
HK16	笹倉古墳	鉄刀	残存長3.8 最大幅2.34 最大厚1.08 重量12.76g	背に原面残る
HK17	笹倉古墳	鉄刀	残存長5.45 最大幅2.35 最大厚0.67 重量13.66g	木質残る
HK18	笹倉古墳	鉄刀	残存長3.2 最大幅2.23 最大厚0.51 重量4.7g	刀身の剥離片か
HK19	笹倉古墳	鉄片	残存長2.3 最大幅1.52 最大厚0.34 重量1.18g	刀子切先片か
HK20	笹倉古墳	鉄片	残存長3.15 最大幅1.26 最大厚0.69 重量2.67g	刀子の刀身片か 背に原面残る
HK21	笹倉古墳	鉄片	残存長3.5 最大幅1.23 最大厚0.31 重量1.57g	
HK22	笹倉古墳	鉄片	残存長2.1 最大幅1.5 最大厚0.5 重量1.47g	鉄刀の剥離片か
HK23	笹倉古墳	鉄片	残存長2.3 最大幅1.69 最大厚0.36 重量1.31g	鉄刀の剥離片か
HK24	笹倉古墳	鉄片	残存長2.5 最大幅1.25 最大厚0.37 重量1.2g	鉄刀の剥離片か
HK25	笹倉古墳	鉄片	残存長2.25 最大幅1.59 最大厚0.38 重量1.32g	刀子・鉄刀の剥離片か
HK26	笹倉古墳	鉄片	残存長2.7 最大幅1.28 最大厚0.49 重量2.05g	刀子の剥離片か
HK27	笹倉古墳	鉄片	残存長1.8 最大幅1.6 最大厚0.61 重量1.84g	鉄刀の剥離片か
HK28	笹倉古墳	鉄片	残存長1.9 最大幅1.42 最大厚0.31 重量1.12g	刀子・鉄刀の剥離片か
HK29	笹倉古墳	鉄片	残存長2.95 最大幅0.88 最大厚0.29 重量0.86g	
HK30	笹倉古墳	鉄片	残存長2.4 最大幅0.69 最大厚0.27 重量0.58g	鉄鏃の剥離片か
HK31	笹倉古墳	鉄片	残存長2.15 最大幅1.68 最大厚0.28 重量1.03g	刀子・鉄刀の剥離片か
HK32	笹倉古墳	鉄片	残存長2.05 最大幅0.97 最大厚0.28 重量0.61g	刀子・鉄刀の剥離片か
HK33	笹倉古墳	鉄片	残存長2.05 最大幅1.22 最大厚0.27 重量0.66g	刀子・鉄刀の剥離片か
HK34	笹倉古墳	鉄片	残存長1.95 最大幅1.05 最大厚0.26 重量0.64g	刀子・鉄刀の剥離片か
HK35	笹倉古墳	鉄片	残存長2.5 最大幅1.14 最大厚0.21 重量0.8g	刀子・鉄刀の剥離片か
HK36	笹倉古墳	鉄片	残存長1.6 最大幅1.33 最大厚0.25 重量0.84g	刀子・鉄刀の剥離片か
HK37	笹倉古墳	鉄片	残存長2.4 最大幅1.23 最大厚0.22 重量1.1g	刀子・鉄刀の剥離片か
HK38	笹倉古墳	鉄片	残存長2.35 最大幅1.45 最大厚0.27 重量1.25g	鉄刀の剥離片か 木質残る
HK39	笹倉古墳	鉄片	残存長2.05 最大幅1.22 最大厚0.22 重量0.83g	鉄刀の剥離片か
HK40	笹倉古墳	鉄片	残存長2.45 最大幅1.4 最大厚0.27 重量1.04g	鉄刀の剥離片か
HK41	笹倉古墳	鉄片	残存長2.0 最大幅1.0 最大厚0.35 重量0.76g	刀子・鉄刀の剥離片か
HK42	笹倉古墳	鉄片	残存長2.05 最大幅0.92 最大厚0.26 重量0.55g	刀子・鉄刀の剥離片か
HK43	笹倉古墳	鉄片	残存長1.4 最大幅0.87 最大厚0.26 重量0.37g	
HK44	笹倉古墳	鉄片	残存長1.2 最大幅0.83 最大厚0.19 重量0.25g	
HK45	笹倉古墳	鉄片	残存長1.7 最大幅0.67 最大厚0.15 重量0.23g	
HK46	笹倉古墳	鉄片	残存長1.15 最大幅0.48 最大厚0.22 重量0.14g	
HK47	笹倉古墳	責金具	長径1.8以上 短径2.2 板幅0.88 重量2.34g	内面に木質残る
HK48	笹倉古墳	刀装具	残存長2.05 最大幅1.67 最大厚0.54 重量3.08g	鞘尻・柄頭の破片か